

寶隆公詠集

秋冬

特別

^4

8066

2



^4
8066
2



< 95-228 >

五秋



うらたしむ秋もつららし見せむ秋のこころ萬のこころ
よそもふれ忘れぬ秋の夕ふらむ秋の夕ふらむ

秋来水邊

永正十七月次

相のこころのまをせはひかひの流るり秋の風は吹く

閑居秋来

こころのちかひのちかひの強きまをせはひかひの流るり秋の風

新秋風

ちかひのちかひの秋風の初風をせはひかひの流るり秋の風

新秋風

仙人のいふまゝに心なきを思ふことして秋のまじり
まよふふまゝ思ふことして秋のまじり
しこちも秋を教ふことして秋のまじり

初秋雨

承和八四月次

初秋

のち来るる浪白の袖に
後撰又大承三七廿五
着ると又とさゆ葉のさうらちをうけし秋の初風

初秋の

お化かして石よりさし
何れか袖にさし秋の夕た露

初秋凡

又秋の夕まきては
とくしあかぬ今更の秋を
秋の初風

初秋朔

文龜元八四月次

東の月ももぬふまがり
秋の初風

初秋夕

文明十三

し初回あるおとし
秋の初風

初秋臆月

永享三七

思ひし秋の夕ま今更の秋の初月
秋の初風

初秋月

永正七廿五四月次
とらぬりし月の如の秋やたけけみみ水と田川の涼しき

永正七廿六月次
神秋兼

初秋衣
初秋衣

永正七廿七十月次

この秋うさぎの衣の初をせにむもふと路の宿とかなん

用初秋

けいこうれおの秋の初月した袖ぬはくし川かき

河初秋

浪くまの秋立ちく大井川かきたかかき

早秋

文龜三十二四月次

たのふむわつとさうさきまのふらぬ秋凡のそ
草木しおゆらふ秋もあつめ神さきりあまき

早秋月

まらぬらぬ秋の色の山口より夕月東つと

夕月東つと秋のちり出て初月とひ水のきく兼

文明五辛卯年次
田早秋

はくし山に初らさけくちる家のまほくの田井の秋の初凡

行路早秋

永正五四月次

かり衣吹之吹乃の山れとらさきや秋のきらん
遠郷早秋

峯の雲外しの風しづかきらるる出づる秋一の里

残暑

夏の過ぎ去るも有りぬるの秋もあついで秋文のしらき
永正七年四月

早秋

蝉の羽のまはれぬ秋の早き
永正七年

七夕

七夕の夜はせむせむのしづかき
永正七年
天の星雲のつらねてきぬ秋の早き
永正七年
今日もあつてはるる秋の早き
永正七年

七夕の夜はせむせむのしづかき
永正七年

織女天の星

天の星雲のつらねてきぬ秋の早き
永正七年

織女天の星

七夕の夜はせむせむのしづかき
永正七年

七夕月

七夕月のつらねてきぬ秋の早き
永正七年

漢霄月明

七夕月のつらねてきぬ秋の早き
永正七年

七夕夜涼

いづれ川が流れてもさし月のまじりては星合の光
かきとちかふ月しなうれて七夕の神もつららの川か
まじやうもさし川を流るる海らうしつららの光

七夕風

頃標二天正三十七年
いづれ川が流れてもさし月のまじりては星合の光
かきとちかふ月しなうれて七夕の神もつららの川か
まじやうもさし川を流るる海らうしつららの光

七夕雨

永三六四月
しつららの川が流れてもさし月のまじりては星合の光
かきとちかふ月しなうれて七夕の神もつららの川か
まじやうもさし川を流るる海らうしつららの光

織女雲

いづ村の雲は流るる七夕の光のまじりては星合の光
かきとちかふ月しなうれて七夕の神もつららの川か
まじやうもさし川を流るる海らうしつららの光

織女雲為夜

七夕の光のまじりては星合の光
かきとちかふ月しなうれて七夕の神もつららの川か
まじやうもさし川を流るる海らうしつららの光

七夕霧

水正八月
天川に日くまの光のまじりては星合の光
かきとちかふ月しなうれて七夕の神もつららの川か
まじやうもさし川を流るる海らうしつららの光

七夕草

百草の花のまじりては星合の光
かきとちかふ月しなうれて七夕の神もつららの川か
まじやうもさし川を流るる海らうしつららの光

七夕草花

花のまじりては星合の光
かきとちかふ月しなうれて七夕の神もつららの川か
まじやうもさし川を流るる海らうしつららの光

頃標一

七夕の光のまじりては星合の光
かきとちかふ月しなうれて七夕の神もつららの川か
まじやうもさし川を流るる海らうしつららの光

永正四年月次

七夕木

天川うづの木の木のきりこころこころいほしみていほ一星合のえ
初秋のゆぬせうころあふ葉をむくころころいほのまのまの

七夕草

七夕のまはるやせのせのせのせのせのせのせのせのせのせのせのせ

鏡撰卷一 七夕陽翠

天川浪のせもけら七夕のうづいほいほいほいほいほいほいほいほ

七夕管絃

し日はあつとふれしはふれしはふれしはふれしはふれしはふれしはふれし

七夕縁

かきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

七夕扇

しりふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

七夕衣

ころころころころころころころころころころころころころころころころ

七夕枕

永正七年

年へてもいほの縁縁七夕の国からいほの縁縁七夕の国からいほの縁縁

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

若取七夕

永正五年月次

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

七夕山

七夕の一夜に夢のうららかにせしむるうらなぬに月日す

七夕野

何ゆまのついでに星の天川に流るるわが若きうら

七夕川

なみふくりに流るる七夕の中へ有ては天のつとをえ

文相九年七月廿七日 海邊七夕

占るてぬえよ。うらなむしやふくはらふ。天の星の光の
海乃もも林のうらなむ。七夕はめのうらなむ。うらなむ

七夕別

うらなむらうのうらなむらう。うらなむらう。天の川をえ

七夕後期

大岡亭會中座

うらなむらうのうらなむらう。うらなむらう。天の川をえ
うらなむらうのうらなむらう。うらなむらう。天の川をえ
うらなむらうのうらなむらう。うらなむらう。天の川をえ
うらなむらうのうらなむらう。うらなむらう。天の川をえ

七夕節事

高のうらなむらうのうらなむらう。うらなむらう。天の川をえ

平女抗秋来

うらなむらうのうらなむらう。うらなむらう。天の川をえ

二星適逢未叙別緒依之恨

はるのさやの川流るのさのさみきとて

今宵織女渡天河

梨のまらさのわくふのつらさのつらさのつらさ

織女笑久

と川とめらさのさのさのさのさのさのさ

七夕祝

若くはのぬらうてん天にささたせぬ命のた

霧織女懐

永元十二月次 天川君さゆいかに結きりのさのさのさのさのさ

萩

夕ゆれれせぬりとも方をうけぬ秋まぬ萩のた

末はなみとしかづ萩のさまたらうてのさのさ

萩浦

永元八月月次 おはよもつゆのさしと萩のさのさの結凡とてさのさ
いささしゆあまの袖とてふてはまらぬ萩のさのさ

胡萩

と胡れれと萩はさぬさ言ふささのさのさのさ

夕萩

せにさぬさのさのさのさのさのさのさのさ

獨用萩

花のふくやと花のつれとこころのふくやと花のま

萩鷺三首

夢ちりし花のいはなやふれと花のまは萩のよせ

萩近枕

かゝん萩のやうらゐ萩のままげこしやのらと花の

萩もゆ花

よらゝの花のまゝ萩のまにふらふら花のまに

萩萩

わらわらと花のまゝ萩のまにふらふら萩のまに

萩萩

花のまゝ萩のまにふらふら萩のまに

萩萩

花のまゝ萩のまにふらふら萩のまに

萩のまげ

花のまげ萩のまにふらふら萩のまに

萩

花のまげ萩のまにふらふら萩のまに

花のまげ萩のまにふらふら萩のまに

萩洲威

花のまげ萩のまにふらふら萩のまに

草録七世八續撰三

きくらののこすの池に村秋萩の花をかゝるるさ城の原

愛萩

久鬼二七四月次

とろりしまほる成ふかじりて花よき萩の下にせ

胡萩

續撰吟集三

うさみ家さきよめあぢ小萩尔こころ廉く整の朝前

萩露

永正七四月次

秋さくころこころのり下葉さかもよこころい萩の上り

萩如錦

萩の花こころ箱の物果しよ花らさむとさゆわさし

沙路萩

さるの物さかろつ花ら今こころ見たらまほら萩の花也
きりかきせのさのあさるんかあらら萩の萩

萩秋萩

あふらささの廉のまよも小萩のうの秋りあらん

秋情の萩

永正九四月次

秋としこしらえ先ゆいま萩原さし萩一の書とみん

ささり

ささりささりささりささりささりささりささりささり

女帯花

あふらささりささりささりささりささりささりささり

まゝのしとみらんもあしや女高花うらわまの宿のたれ

女高花

永正七年四月

うらわまの宿のたれ

宿

峯のや入白の宿のまうらふ花のまうらふ

宿

らうらまの宿のまうらふ花のまうらふ

花のまうらふ宿のまうらふ

永正七年四月

花のまうらふ宿のまうらふ

夕宿

のまうらふ宿のまうらふ

のまうらふ宿のまうらふ

のまうらふ宿のまうらふ

宿

のまうらふ宿のまうらふ

宿

のまうらふ宿のまうらふ

宿

のまうらふ宿のまうらふ

平正二十日欠

岡居房

田録くもさうき世外の花さし宿花を風せてうめん
平正十四日欠
あつらんやうらわ花すたうもぬ道のしきさうの宿

平正二十四日欠

早房

松さてる思の丸花うらたしき浪もせうかおせのしと

千文明三十三

原房

露ぬくもわつとほけしとのけつ丸花かたも袖ぬり

刈萱乱風

水花(と)こことこののうたふれい吹りぬかんののうも

南董風

もれまのかうらたしほ花うらからぬぬに南のぬ

槿花

しおのうたふれいけつぬふみせもかよみとぬの宿

槿

あつらんやうらたしほ花うらからぬぬに南のぬ
平正十四日欠

隣槿

萩の葉もまにふれいけつぬふみせもかよみとぬの宿

早花

あつらんやうらたしほ花うらからぬぬに南のぬ
平正十四日欠

草花早

けりもよわらぬ花の床もまじしとてさかきつる花の床も
花

折草花

各九七奇合
白妙の袖よりけりなをまじしとて花の床もまじしとて

既秋花

うらぬてくらの世にさかきと秋の花の床もまじしとて

風動野花

小萩原田ら出しけりなをまじしとて花の床もまじしとて

霧同野花

各七四四合
けりなをまじしとて花の床もまじしとて朝夕霧の花の床も

各園花草香

各一七四四合
けりなをまじしとて花の床もまじしとて

秋野花

各一七四四合
けりなをまじしとて花の床もまじしとて

露

各二四四合
秋の草花もまじしとて花の床もまじしとて
各一七四四合
けりなをまじしとて花の床もまじしとて

曉露

袖よりけりなをまじしとて花の床もまじしとて

袖露

各二四四合
けりなをまじしとて花の床もまじしとて

文龜三四月

竹露

叢露

夕陽の影にうつてかたむせのほの花の露はまはるる

庭露

草虫のこころをなほとせし秋の露はかたむせの露もあはれ

原露

秋の露は小葉のうらみはなほとせし秋の露はかたむせの露もあはれ

紅と白とせし道のうらみはなほとせし秋の露はかたむせの露もあはれ

水露

促人の袖にうつてかたむせの道のうらみはなほとせし秋の露はかたむせの露もあはれ

水露

凡そうつ小葉のうらみはなほとせし秋の露はかたむせの露もあはれ

虫

花の香もあはれとせし秋の露はかたむせの露もあはれ

永正四四月

長いよのうらみはなほとせし秋の露はかたむせの露もあはれ

秋虫

こころのうらみはなほとせし秋の露はかたむせの露もあはれ

尋虫

こころのうらみはなほとせし秋の露はかたむせの露もあはれ

文明十三十八禁裏四月 冬十首 續三外三禁裏四月

文龜二七月

遠尋虫

乙のぬきし秋のうらみしてかく虫のまゝうらみかきけり

曉虫

文龜元國六四月

秋月ここの虫の鳴り羽のここのいふや虫のふく

栢道微吟

きりし秋のつひくをいふ虫の有明の月よまゝうらみ

夕虫

十文月十三

あさひのほろのまのさゆつらうらみしゆい虫のうら

きりし吹く名らうと秋月ここのいふやうらみし神の夕

この夕に寝て千とせぬ虫のまゝよこまぬ秋の夕

夜虫

枕の外しとらやまらうらみかきけり

雨虫

文龜三六月

かく虫のまゝいふもむらみし秋の雨のうらみかきけり

雨の虫のつひくをいふ虫のまゝうらみかきけり

いしの虫のまゝいふもむらみし秋の雨のうらみかきけり

床虫

かきけりいふもむらみし秋の雨のうらみかきけり

花虫

いふ花のまゝいふもむらみし秋の雨のうらみかきけり

原虫

永正二四月次

わいらるるもこころもいへん虫のまはるるのまのまのま

野虫

永正四七月次

まじらぬまはるるのまのまのまのまのまのまのまのま

野亭園虫

ふらふらとまはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

田后虫

永正八六月次

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

籬中虫

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

虫かたがは

後撰巻三

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

虫怨

永正八六月次

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

早蛩鳴後歌

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

永正七八月次

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

鷹

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

永正三九月次

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

初鴈

あきらかにあらはれしやうに ちはるも秋のたつばみののさくら
いづのこぼれをばまきりて かにあはれきりて かくしめしむ

晚鴈

あまのくにそとにやゆきくさくさのやまのふりしのけしめしむ

夕初

千文明十三
あまのくにそとにやゆきくさくさのやまのふりしのけしめしむ

言天譚

永正九年四月
あまのくにそとにやゆきくさくさのやまのふりしのけしめしむ

享録元九廿六初鴈横月

あまのくにそとにやゆきくさくさのやまのふりしのけしめしむ

雨雲端

あまのくにそとにやゆきくさくさのやまのふりしのけしめしむ

田中

あまのくにそとにやゆきくさくさのやまのふりしのけしめしむ

葦邊

あまのくにそとにやゆきくさくさのやまのふりしのけしめしむ

濱

あまのくにそとにやゆきくさくさのやまのふりしのけしめしむ

鷹砂拾遺

あつちの氷のさびさびとちかちかしたるはつたはつたさきさき

後一

ふりかへるもあつちの氷のさびさびとちかちかしたるはつたはつたさきさき

下宮結列

月の林よりあつちの氷のさびさびとちかちかしたるはつたはつたさきさき

あつちの氷のさびさびとちかちかしたるはつたはつたさきさき

あつちの氷のさびさびとちかちかしたるはつたはつたさきさき

麻

見花より秋見吹くさきさきとちかちかしたるはつたはつたさきさき

あつちの氷のさびさびとちかちかしたるはつたはつたさきさき

秋麻

あつちの氷のさびさびとちかちかしたるはつたはつたさきさき

冬麻

あつちの氷のさびさびとちかちかしたるはつたはつたさきさき

麻文麻

あつちの氷のさびさびとちかちかしたるはつたはつたさきさき

夕麻

あつちの氷のさびさびとちかちかしたるはつたはつたさきさき

夜麻

あつたての鹿の皮を剥ぎ取らば鹿の皮は白く

冬鹿四二日月次 小鹿

にちち鹿の皮を剥ぎ取らば鹿の皮は白く

冬鹿四二日月次 小鹿

あつたての鹿の皮を剥ぎ取らば鹿の皮は白く

あつたての鹿の皮を剥ぎ取らば鹿の皮は白く

あつたての鹿の皮を剥ぎ取らば鹿の皮は白く

鹿の皮

あつたての鹿の皮を剥ぎ取らば鹿の皮は白く

鹿の皮

あつたての鹿の皮を剥ぎ取らば鹿の皮は白く

あつたての鹿の皮を剥ぎ取らば鹿の皮は白く

鹿の皮

あつたての鹿の皮を剥ぎ取らば鹿の皮は白く

鹿の皮

あつたての鹿の皮を剥ぎ取らば鹿の皮は白く

あつたての鹿の皮を剥ぎ取らば鹿の皮は白く

鹿の皮

あつたての鹿の皮を剥ぎ取らば鹿の皮は白く

あつたての鹿の皮を剥ぎ取らば鹿の皮は白く

鹿守長友

かゝる鹿守の物語は、鹿の狩のうゆい、鹿の里

鹿守増真

永正三十四月次

林の守り鹿守のうゆい、鹿守の里

鹿守繁

享禄三十四月次

山里の神鹿守のうゆい、鹿守の里

遠田鹿

遠田の鹿守のうゆい、鹿守の里

鹿守

三首懐永正三十四月次

言つて鹿守のうゆい、鹿守の里

鹿守

永正三十四月次

思ひある鹿守のうゆい、鹿守の里

小鷹守

小鷹守のうゆい、鹿守の里

江鷄

千文明三

凡そある鹿守のうゆい、鹿守の里

江鷄

うゆい、鹿守のうゆい、鹿守の里

鴨

文永三十四月次

母の鹿守のうゆい、鹿守の里

永享四年八月次

澤畔野

秋のつらさよ 澤田のたに 水もひいて けしきも
澤邊野

田鳴

あつたのつらさよ 田鳴のつらさよ 鳴のつらさよ

秋田

夕日新野 山乃又とくすくこまに 稲葉とかがきよなる秋風
あつたのつらさよ 鹿のきとをりたる 小田の原の

秋田風

あつたのつらさよ 秋田風のつらさよ

秋夕

あつたのつらさよ 秋夕のつらさよ
あつたのつらさよ 秋夕のつらさよ
あつたのつらさよ 秋夕のつらさよ
あつたのつらさよ 秋夕のつらさよ
あつたのつらさよ 秋夕のつらさよ

秋夕情

あつたのつらさよ 秋夕情のつらさよ
あつたのつらさよ 秋夕情のつらさよ
あつたのつらさよ 秋夕情のつらさよ
あつたのつらさよ 秋夕情のつらさよ
あつたのつらさよ 秋夕情のつらさよ

秋夕傷心

あつたのつらさよ 秋夕傷心のつらさよ
あつたのつらさよ 秋夕傷心のつらさよ
あつたのつらさよ 秋夕傷心のつらさよ
あつたのつらさよ 秋夕傷心のつらさよ
あつたのつらさよ 秋夕傷心のつらさよ

あつらひのこゝろをいひけりよとてしなきれきつれ秋の夕日
水郷秋夕

梅のこゝろよよおとほのこゝろよよかろくろくえしつれ秋の夕日
海路秋夕

あつらひのこゝろをいひけりよとてしなきれきつれ秋の夕日
霧

山いねのこゝろをいひけりよとてしなきれきつれ秋の夕日
消残る雪のしづくのしづくみまろく

永正九四月次
秋の池よきをいひけりよとてしなきれきつれ秋の夕日

用字

千文明十三
関の若乃つていひけりよとてしなきれきつれ秋の夕日
滝音

秋の若乃つていひけりよとてしなきれきつれ秋の夕日
きよの海ありわつていひけりよとてしなきれきつれ秋の夕日

古酒秋霧
あつらひのこゝろをいひけりよとてしなきれきつれ秋の夕日

須磨吟集三
霧同船
山寺の明きよからいひけりよとてしなきれきつれ秋の夕日

河霧晴

永正九四月次

いしとらんのまじりもたし一胡弓のゆいあせすもいしとら
のぬもすしきやうとあふらゆいしとらたかしの胡弓

霧中塩竈

秋の心ゆくゆきもあつて一や胡弓の音の園のうらや

秋宮弓

秋もろやゆきとふ今いふゆきのうらや

霧隔山寺

弓の海うこもわりすあふふ泊舟のゆの音なり一

あつて

あつてもやあふのうらやあつてあつてあつてあつて

駒込

あつてもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

深夜駒込

あつてもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

指事

あつてもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

いふ

あつてもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

田家秋寒

思の乃松にみもやと 朔の霜田面の色さこそ今も

月

永正七十二

秋の月中は有る葉は老成していらぬと
抱くもよもころり月のまゝ今もころりし
てこころまは氷言すあら山に月影うす天の川
みもころり月うころりたふもいも人分
里乃名の社にともなふ故をいぬまか
るすしてしひめさるる留りし月ころり
物思しのみよこころりてころり油乃月
次乃りきてはせれ老のころりて月ころり

明應元八廿二平賀殿かほ示

秋月

たふふおとくくくんとくの中しころり秋の
虫のい虫花の色は秋とやいころりてふ
待月

草乃あまのちの月と夕陽の影もあつた
吹けす秋をよかよむゆはくこの峯の
音とよこころりてのころりてのころり
人よこころりてのころりてのころり

流水待月

ゆらゆらと流るる水のころりてのころり

十五夜

月影の白く照らす秋の夜
月影の白く照らす秋の夜

月影の白く照らす秋の夜
月影の白く照らす秋の夜

十五夜既月

棟中十五夜十五首の宛

庭の草にうらみけし秋の夜
庭の草にうらみけし秋の夜

晴夜月

天明九七哥合

とらふ雲の影を照らす秋の夜
とらふ雲の影を照らす秋の夜

停午月

永正五四月又

出ぬ入ぬの影を照らす秋の夜
出ぬ入ぬの影を照らす秋の夜

深夜月

おぼしき影を照らす秋の夜
おぼしき影を照らす秋の夜

十五夜後月

川の流るる影を照らす秋の夜
川の流るる影を照らす秋の夜

不知夜月

若もさき影を照らす秋の夜
若もさき影を照らす秋の夜

立待月

後撰拾遺集巻之五

立待月
立待月

本夜月

よしの影を照らす秋の夜
よしの影を照らす秋の夜

有明月

永正九二月六日

まきよのちやに秘蔵の巻にいてはしをふみ物と有明月

永正十九四月六日

乃に白糸の山のとまけしうす霧の中宛なきあり明の月
月きよとちうさ川糸の川きよとにけし神と有明思礼
思より命かきよに有明のうさうに世をけくせとや

永正十九四月六日

曉月

秋の夜乃にく秘蔵の巻の月おもしろく待ひけり

永正十九九月廿二日

寢る月

りやわらわらと老の夜雨とにやと月と好まぬせし
十三夜雨のうらりうらり十五夜を勝院うらり

糸一車取思おてしはかりし

雨ふれたり若くは不ふりて月ふれたり林と社ありや

十三夜晴

糸一車のみらり月入世よこてはるる若くはうらり

高徳月

浪ととくみ秘蔵の巻にうかけられて月もふかき物と有明月

見月

永正十九四月六日

名残のれや今いづり秋の月いづり乃に若くは

見月傷老

あつとくし月のうらりならははるる老をふりては

けい
あつとく

對月

我のこけと何こ一和の志りとてしれぬ月をう舞ふ

對月待客

何れをうく道ゆきなりはあり有と月をう舞ふ

翫月

今いふ秋の月や花の房とまきあはさし
つきていま秋の光とてりゆら月をう舞ふ
ゆき乃戸いとさうらのや系竹のまねへて何れ月をう舞ふ
いくめりあすこえん君代の光とあやう雲のふり月

月前風

葉の葉よほのめきやや夕月とおしこぬ秋川さか

月にのこ心いんさの山川さかむむ秋の物とて

鬼よさしむるゆき夜の月に吹とてみぬ葉の下凡

霧回月

志かてえん立回く霧とすし月の秋の中をう舞ふ

霧中月

夕きりのまききの花の房とてり月をう舞ふ

月前霧

山とよの霧一むくの平乃回り何れ月をう舞ふ
明けの光とてり月をう舞ふ

月前雲

飛三
月より雲のけしと山にや花をふかむ吹のほろあ

月前露

とろをしとろをさすのあとのあすは月をさへ
世乃教よせれとやえ昔の袖とめて月が空にやとれ
陰ぬき露を津く下ゆてとあをためる月入ありれさ
あといふあよかけとやとくく一あを物と月をわかると

月前霜

なると竹の女月のよめかけらうりにくくえきゆを露し雪かり
月前露

山月

ぬつき来り月がわおけらあをとおもこのうかろ空のし新
山のもよやうふわし雲のふすしきけり空に月が
すえりけり月がかのへ乃秋月とやまわとめらるる川を
せ中といけくふす田こめ比とすしてふ乃月とみうら
深き乃山のとくさの秋けり田秋を何とや月とすしん
初行むいふとさうが山のえりうら月をなしてきうら

山月入簾

平三六四具
山月のうらとあはるをみて雲乃みよりとふふ乃くの月
玉すこれゆらあけてとねり雪おとさうとむる月

永正十四月云

深山見月

いづれかよのこけふりてふらふのたまはるるやうけはく月か

田山月

凡のまよらちば山の下葉さるるやうけはく月のか

遠山曉月

雲霧をぬもて引てけ出月をいへるる山のか

松月

山ひこも夕三つよりてふ本ひく露さるる月を出ん

巖月

志嘆り浦や月よかりてはひえの願のいふるる月を

中々や月よわもはるるは願ふ心のかめあのみ

谷月

石せしこもりたる月やまはるる月をいへるる月を

よふりいもやく言ては夕月のさすけとるる石の下

杜月

ゆゑぬ栞のりりこす急し月かうふいほはるる

消えぬ栞のりりの秋乃つら月のつるのねをさるる

思月

月いづれかよのこけふりてふらふのたまはるるやうけはく月か

思月

なすむらじん情しこころめるるこころや月は思ののち

国月

道乃よむまじゆじ月は格々夜なるこころは園やま
又やこゝろのこころのあはれなるまじりけさしき秋のあはれ

野月

心とやあはれのこころあはれなるこころは月よりあはれこころ
永正三四月
すしよしよしこころのこころの秋の月いなりいあはれこころ路こころ

野徑月

重云はいつてあはれこころは何とせり月より借てとすめり月より
後撰みえ永正三八月
かきけり花のこころの袖のあはれ月いなりあはれ家つとよせん

野店月

心あはれあはれあはれ秋のこころは月より借てとすめり月より

橋月

鶴のこころはあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
うらやまのこころはあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

後撰みえ永正三八月 水邊月

石のこころはあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

月浮流水

さけりかの水のこころはあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

水中月

昨日の秋の中をさうなるやうにやうにさうにさうにさうに

石間月

石をたたく石をたたく石をたたく石をたたく石をたたく

浪月

波の音もやうに月をたたく波の音もやうに月をたたく

波の音もやうに月をたたく波の音もやうに月をたたく

瀬邊月

瀬邊の月をたたく瀬邊の月をたたく瀬邊の月をたたく

瀬月

瀬の音をたたく瀬の音をたたく瀬の音をたたく

池月

池の音をたたく池の音をたたく池の音をたたく

冬月三
冬月三
冬月三

池の音をたたく池の音をたたく池の音をたたく

池上月

池の音をたたく池の音をたたく池の音をたたく

二月

冬月十年九月三日
冬月十年九月三日
冬月十年九月三日

江戸月

江戸の音をたたく江戸の音をたたく江戸の音をたたく

かゝるはの政乃こときよみむしり月をさうしすまの
湖氷月

こゝれは夏のゆかき水とりぬかのうらぶやといはる

湖月

昔とて夏花はほしきる月より好くゆのゆ凡
けよる花は徳をゆきまて月を好むゆのゆ凡
こころやまきしき諸るもか嫌うしきる月か
あき凡の仔細のとまや電にきて月よりかきるゆ凡

海邊月

胡霧乃月ありのなをう却とじりこの何れやえ
山とよのゆとろくぬゆ路ふらとじりゆのけりか舟

海月

永正十八月次

志げゆやのゆかしてふくまうり月まきあん
山のふらうてのふらうのゆかゆのゆの出

浦月

ねく月やまをさる浦はのゆかゆかゆか
わらうしふじ井の浦の秋乃月をれゆら
月をえんゆあそものゆかゆかゆかゆか
すこわら月乃若こる浦をせにこ育うらぬる
山くゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

雲はなまき浪とそまいてすこのほろ月まうみ春浦の初鳴
心ありやうらんとおやふた上月をふらね垣の向の浦

千夕明十三

正月

くく三ゆや宿ねる浪とちくは二月と破くすりまやもた

破邊月

月そすし破きてはくくう海りいれのも砂の敷るむらび

鴻月

永正十三八月六

秋のよしなまき若く乃とおかゆの月やも二あけく物まが
玉とり留伊良こり鳴り秋の月をいねあふと袖かこし哉

泊月

とゆり船とゆいこりけな月よ子置のくまぬあから

却月

あへつら深ふりありのまよりよて月か却といふまきこらん

花洛月

おとこのあはれが船とすし月のしらぬとらの却とらみら

洛湯月

雲霧の山よりららけけ月か却のややすこもらん

禁中月

それららるものぶとすし結凡とぬらぬあけ九重の月
塵の外方を忘れても雲のうらなはしゆり月をこら

永享其四月

社頭月

秋の月... 神の... 四方... 光と... 八雲... 秋の月神代... 田

右寺月

人... 野寺の月... 野寺の月... 野寺の月...

永享其四月

左寺月

秋の月... 野寺の月... 野寺の月... 野寺の月...

水郷月

雨... 水郷の月... 水郷の月... 水郷の月...

田家月

山... 田家の月... 田家の月... 田家の月...

山中月

男山月... 山中の月... 山中の月... 山中の月...

閑居月

おもしろいひかりはゆき山ありと花あり乃世とく月か

围中月

さすうとい氣危をかり乃ゆき乃戸をあけておゆき乃月か
秋内と忘れ一国の扇とて月とたくて又やとゆ

隣月

千本明三
すむいをいみはく一をあり乃月とく乃病中と

庭上月

よらよ木乃ゆきはむく秋は乃ゆきと庭乃月とゆ

林苑月

永七七八四月

秋とて乃月乃ゆきの花をのこまゆきと忘れ乃ゆ

月前乃花

小萩乃ゆき乃ゆき乃月乃ゆき乃秋乃凡の宛

草露月

凡とていあとの末乃ゆきのゆき乃ゆき乃秋乃宛

月前乃萩

きりせむ乃あつ乃ゆき乃月乃末乃ゆき乃秋乃宛

月前乃菊

白ゆきの花乃ゆきの色乃ゆき乃ゆき乃秋乃宛

月乃ゆき乃ゆき乃ゆき乃ゆき乃ゆき乃秋乃宛

月下為

かきりと朔入燈のすこゝ高きうらやまの月の光りて

月下清笈

ひてらん燈ととの松の三ひくくあつら色はくまはる葉を

昔上月

月うすし岩蔭の昔しや油の秋ふくく恋心は

月下葛

あをくひのま葛。原乃林は月をさくくあまみきぬん

月祈田

おてりり神やいく良乃露をねよりなめはる次月やとすん

木間月

木の窟らわく束待あていんしきぬあく月とさうん

月前松

月あゆく雲霞はくすと山嵐も松枝ふれて吹乃ほるん

延徳元年九月 松間夜月

松を元子とれぬくしきて木のら月うけはぬあま

承正四年四月 雲はま松やくる小田をせし海をそいこあまやうかき月をさるん

杜月出

永正六年八月

浦風乃月や重井がけしとら松はつるすけかろく
しとあつらるるといさ田乃月さる心はる形乃松の光りく

月前秋

めしととありありと秋乃月若くはるる秋の二とあり秋

月前鴈

永享三四月

きし世乃不也いほさせ思月とむく社よとふんきあん
なか宛きてたりにらり乃海とえささや月と鳴やうん

月とれとむくしき雲井より一乃海と落してやゆく

又明正徳六十月

かきよすのまきころ上に落はんとやあ月とやうなる秋

とたぬうらり乃海とえり秋月まきあぬ老のたせと秋

月前同下

三首懐家

ほしあぬ雲より因く鳴かつりり羽せり月よとよ下

おしとあり鳴あうりのおうとむむくおほの月乃雲井上

月前虫

霜とみとさみとすき秋乃虫乃月よりの虫乃多うら

ひよきうらと天はえさうなうらや月乃くく松虫乃多

月前廉

秋の花よとんは乃野乃月あうりとさきささうらと

月似石

月乃もこれぬ秋乃色うらとささ乃兼乃十とるうらと

物いささうらとささ乃月とせり昔とく

月似鏡

文明古わ軍家守合

山もつと秋のやうそまーもすつみまねと月のすめをよ

月亦衣

ひとりぐりあふり月心あはれやちかき本乃吉のみをせ

月照衣

名にいも雲井乃月のこ車一と昔のあやといあやうひり

月似扇

あまかけの秋乃扇のこれかきさきまかき袖乃月あふ

月似弓

こりやらまね三所きさう月影いひあつ志ぶる百明乃衣

月似心

浪乃上の月やかきさきさうりりりりりりりりりりりり

月亦船

かきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

月亦鐘

鐘標又大永三六八
けいさ乃月こまえんは里あゆむ秋のそとの秋のそとをきか

遊子行月

冬冬四国三月月次
かきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

漢父悼月

心かきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

惜月

一衣たよのけもやすふきひておかしきまがさるる月ふ
而の寸あふふきふとて秋乃月雲乃うけくもやあめ
よかく乃うけのー我おれいーめうもやふふの月

残月掛峯

永三九四日
鷹乃ふこな抱く月乃がうにせうろ阿久き秋乃乃

残月越岡

面影よりなる地やいし朝こくわに道坂の月とみり

月念旧人

見一介ふらう昔の下あ我いに来て袖の月をかうて

海月待客

月よ人むしめおせし有物をいふ人といふも

寄母餞別

物しせうけふかきりとて月もこのれ秋乃葉り

旅宿月

枕ふふ草えよ月のやこしてわらう野々乃あきか

永三二八四日
秋乃乃花と月との草枕しれ袖乃あき

寄母旅宿

いふてありし月乃あき浪々うぬ浦乃ういふ

寄月眺望

心ありてむくこぬすし月よらふていれかき乃あ

寄月述懐

山川乃末々まなほとくはなれがかりぬ月こころ

月前述懐

月や三浦のまをを秋の末乃あともあまの世乃を

寄月尺牘

水とくろのけはうはつ月とてきさのこい伝の光とく

寄月サテ帯

月よまをたつぬや出て入らうてはけぬあつれ世乃中

寄月神祇

あふけちあぬがようはちり乃末のん神代乃月乃すまへ

くわぬぬ神祇のまゝ乃あつと人よいあつれやまひん
大明高八よと
くわぬぬ神祇のまゝ乃あつと人よいあつれやまひん

月前神祇

秋の月こころてすじし石清水じり乃神のひわふか

寄月祝

いづれにしこあまくわをえ乃丹波を筑のあゆとよの
月の秋いそる乃雲乃とあつけき代のけとあつて
危ゆる秋とく好ら大元乃月をたけのあまといの

月契秋

あつすかり秋とわ世とく月乃あままりのこころ

名取月

かみりくもあかしの山くさくさわ月とくみあふ
洞庭秋月

■ 月影のよりのとほさけりてあかりの千里秋風う吹

月不撰処

文有十六七五九
あふきみよ月と雲舟の九重し八重じくさくさく

依処月明

永正九年八月
かけきく記さくさくさくさく秋の月若し世中よりいかに地
若よそあしとわいさくさくさく秋の月おほい外のさくさく
やうり月さく

永正三年三月
名取川をくさくさく秋の東のつとくさくさく
三五月正園

今日よあふ若うせくみたる秋の月さくさくさく光りさく
十五夜既月

。庭よすし奥の敷さくさくさく水と船さく月うさくさく
狂雲如佳月

凡のゆよさくさくさくさくさくさくさくさくさく
秋月自澄江

かき見舟さくさくさくさくさくさくさくさくさく
月露如檀香

ねのさみむつりのさつしんかきんせきふの下のあ

對月念田人

つとせつる月よめあめあつたあつたあつたあつたあ

院随強月引

こころはてあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

月名念田人

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

松衣

うしろ袖のこころにせしめたる衣のたぬ衣のたぬ衣

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

後撰一六の二禁裏春日日法永百首のすゝめ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

松衣

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

松衣響音風

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

月名念田人

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

月下橋衣

永正十一年八月
白母の月乃石や七夕のあやうきあやうき
三河農家
宿して衣づくる月の白母の石は清めおとすにけり

橋衣不眠

一夜衣をらめりていそよひゆり衣をらめりていそよひ

曉橋衣

永正十四年
あらし衣乃山に付多うかき衣をらめりていそよひ

橋衣到曉

永正十六年九月
しるやうくハ衣の多し衣をらめりていそよひ

松下橋衣

あらし衣乃山に付多うかき衣をらめりていそよひ

橋衣誰家

秋のせ乃ぬりし衣はとぬけぬけぬけぬけ

延徳元年九月
右の橋衣

かみし人衣をらめりていそよひ

遠郷橋衣

霜みて衣ぬき月をひいてうとぬけぬけぬけ

お家橋衣

衣ぬき衣ぬき月をひいてうとぬけぬけぬけ

海道橋家

永正七九月廿

くさめめり心あらぬいよ衣う三海流とよてうん

野分

永正八二四月次

うしとくし月とふふいぬ雲はあふいしあはれ田ふ

雲田し村あすく吹かすささかた秋のいふ

天明十三

うしとくしあふいぬ花のうしとくし野分のいふ

朝野分

永正三四月次

うしとくしあふいぬ花のうしとくし秋のいふ

夜分

羽戸あけてうしとくしあふいぬ花のうしとくし

葛風

永正十六五月次

玉海のうしとくしあふいぬ花のうしとくし

菊有新花

菊のうしとくしあふいぬ花のうしとくし

菊花中用

延徳元年九月廿

心とめてうしとくしあふいぬ花のうしとくし

白菊

菊のうしとくしあふいぬ花のうしとくし

菊新

花う田川いふいの園とかりより菊はあふいぬ

後撰吟(享保二)九月九日

まらけは国民のつらさ秋の夜更に此の世に白くして

以菊

林のふくらむらびつる夕暮の回をうらむこころあり

菊に董花

菊のふくらむらびつる夕暮の回をうらむこころあり

砌下菊

ふくらむらびつる夕暮の回をうらむこころあり

雨庭菊

雨のふくらむらびつる夕暮の回をうらむこころあり

菊更爲

田也花うらむらびつる夕暮の回をうらむこころあり

谷菊

昔風をよむらびつる夕暮の回をうらむこころあり

河菊

のらに花うらむらびつる夕暮の回をうらむこころあり

池邊菊

久絶元月欠
のらに花うらむらびつる夕暮の回をうらむこころあり

岩下菊

秋三日月欠
のらに花うらむらびつる夕暮の回をうらむこころあり

君の魂もさき鳥のうらひもさきうして菊の花よそへ
若雨の菊花

みららるる君のこころの花もさきあつた秋の心からゆり
藤の菊

續撰吟七

まじい衣もさきあつた鴈もさき菊の花もさきあつた
翫文庭菊

雲のうらみゆめしき秋の心もさきあつた
菊最競芳

夕べうすのさきあつたみづかき秋の心もさきあつた
菊花董袖

大永十二九月廿四日

わが心もさきあつた菊の花もさきあつた
終日菊

仙舟の心もさきあつた秋の心もさきあつた
菊制鈴

ふと秋の心もさきあつた秋の心もさきあつた
菊送多秋

いとしめらり雲の心もさきあつた秋の心もさきあつた
菊

逐年の菊歌

永正三九四号

雲のうらみゆめしき秋の心もさきあつた

菊香春不如

秋乃菊がふりつゆこのあつゆ凡と暮る梅ののみめ有と

園深菊夾菜

し日とつし暮のこつと花うつこつとふもむむやふく白菊

秋蝶護雛花

秋蝶護雛花
なつゆやうの雛の蝶らん菊のおもはれはつゆ

菊花映霜

じつしあつぬさる初おし白菊合にらん花の夕もあつめ

永正三九四月次
秋の菊とげと映けらん初おし白菊合にらん花の夕もあつめ
百舌鳥

永正三九四月次
たつとつしむこととけらん秋もあつめらん花の夕もあつめ

葛懸松

永正三九四月次
まつとつしむこととけらん秋もあつめらん花の夕もあつめ

紅葉

わつしゆわきあつぬさる初おし白菊合にらん花の夕もあつめ

文龍三四月次
文明十年九月二日庚申哥合
あつぬさる初おし白菊合にらん花の夕もあつめ
相二一八二二水や雨の初おし白菊合にらん花の夕もあつめ

雲

あつぬさる初おし白菊合にらん花の夕もあつめ

黄葉

くらよみゆきし庭の猶ふしむしむし秋の枝の節

永富八月次

尋紅葉

深き山に紅葉のいろかきわけて何れも分るる

千文明十三

久松三九四日次

萬紅葉

かゝるもわづれあはれなればさきさきもみぢの葉

永五九四日次

紅葉色

うけうらやゆきの花はるる月影紅葉

秋のこゝろゆめはくせり山も月もこゝろの葉はるる
下葉ゆきまうす一初句ゆきまうす月影紅葉

山紅葉

山にすすまはるる紅葉はるる
永三三九四月次

深山紅葉

深山の紅葉はるる
永三九四月次

山皆紅葉

山皆紅葉はるる
谷の紅葉

夕毛られ谷より乃々秋風と紅葉うはむいせの

文正三十四月次

紅葉汲水

秋もなり木のこの多しうりきわぬのたのまのし水

續撰吟集三

何紅葉

紅葉この父の岡ぬや秋のせいの川岸のえよきやん

海邊紅葉

丘のやうぬ松今紅葉神代ときわぬ家の父のふ

文明十三

松岡紅葉

山はいま本よりとみらのおらやとらぬ松多うすの記

山のみら紅葉の四り松の父らいましんかきもこら

永正四四月次

紅葉透松

ねの葉いもらとらぬもやんぬかぬかぬかぬかぬか

千支明十三

行路紅葉

ふかしのあもやもわらうし日ゆゆはてようは秋の

紅葉谁家

あつたももらてすもいみまの紅葉あつた秋の山里

續撰吟集三

紅葉増雨

下ももらねいげれらる秋のあまきかたかたあま出つ

永正十九四月次

紅葉似綿

をいれぬいし保ててあのおのいぬかぬかぬかぬか

永正九年四月次 紅葉如醉

美いころから丹がらきさめ秋の紅葉は老の如し
紅葉深

夕とくしのついでに夜とて白き花らさるる秋の紅葉
紅葉随風

うみあけの日のちかづくにさかすかにあけの葉
永正十二年四月次 惜秋

ふしよふたとおもひすそとあつたもあはれこころあはれ
永正十四日次 秋不雨
未葉のしるしりりあがりてんられ花も秋の風吹あ

天明十年九月書合 言秋

あつてこそ秋のちかづくにさかすかにあけの葉は
いづれあはれとやせしめを又いふもあはれ秋のちか
づきあはれとやせしめを又いふもあはれ秋のちかづき

言秋曉月

ふしよふたとおもひすそとあつたもあはれこころあはれ
言秋露

あつてこそ秋のちかづくにさかすかにあけの葉は
言秋霜

天明十三年
あつてこそ秋のちかづくにさかすかにあけの葉は

言林の集

まよほまてとめでしむもあし秋のみのなる葉の葉
言林鳥

ふらふらのふらふらとて秋のふらふらとて
言林残曲

あしとみとてあしとみとて秋のあしとみとて
獨惜言林

ふらふらのふらふらとて秋のふらふらとて

永正三四月元九月盡

胡琴のふらふらとて秋のふらふらとて

木乃とてあしとみとて秋のあしとみとて

秋風

あしとみとてあしとみとて秋のあしとみとて

秋露

あしとみとてあしとみとて秋のあしとみとて

秋霜

あしとみとてあしとみとて秋のあしとみとて

秋雨

村雨のしじやふきすこし月どきりいり

秋閑

うしよりうきたれぬ道わが秋のこもみぢり

秋氷

ちりちりにまはりの葉の色ちりりみぢり秋の氷

秋花

花のうらやましきさきさきの花はさきさき

秋鳥

鳴きつらきうらやましきちりちりかきみぢり

秋書

この時をとりかへしきり跡を秋ちりりいり

秋色

文龜三十四月欠
あつ秋とちあつちり秋の花よみよのしはてた

秋聲

永三四月欠
あつちりちりあつちり秋の紅葉の同よみよのしはて

秋峯

文明年中
横雲のたがひくちりいり月のおよみよのしはて

秋里

秋せれ里のしじやふきすこし月どきりいり

秋田家

秋の祀ら統らたまら下お業らせりやいとぞ秋の比

秋山家

心ゆく鹿の初うこめ山女めあしむるも海に

永正十六年九月廿三日 山家深秋

とてぬーのめのみをあり初さく秋の枝くすし路さ

永正十七年九月廿三日 秋枝

くらめく神や秋をささるる人こころ久きも根乃下家

永正二十四月又 秋神祇

秋をさすめく留る立田の秋葉よわぬ神やさむし

秋葎

山つちの道を辿りて日くらりのとすらゆよ宿やうし

秋懐

なつよもあしきまにうかばも月のうらみ人の世の中

秋祝

君の代はうらまにうらまにうらまにうらまにうらまに

文明十年九月二日庚申年合

四ツ方の國塔ぬ田而もささるる人今くあり秋をさすは比

秋雜

雲乃久海へのくもささるるめあしむるも海に

禁裏為哥 秋地儀

二ありあしきまにうらまにうらまにうらまにうらまに

澁城野

秋の夕べの花の夕や子世の道とていふも

文龜三十四日

文城野

秋の夕べの夕や子世の道とていふも

永正三十四日

水蓮野

秋の夕べの夕や子世の道とていふも

伊駒山

朝の夕や子世の道とていふも

永正三十四日

伊駒山

朝の夕や子世の道とていふも

文龜三十四日

明石浦

秋の夕べの夕や子世の道とていふも

永正三十四日

漫天秋水白流

秋の夕べの夕や子世の道とていふも

永正三十四日

都鷓鴣鳴遅知和長

秋の夕べの夕や子世の道とていふも

秋の夕べ

秋の夕べの夕や子世の道とていふも

秋の夕べ

故百首和歌石清水秘法樂生傳法勸進明二六九七

昔しとるの強くまものいさからゆかたれをうすうり人
こころもさしづぬさうりなねえのいさかひゆかたの神れゆか
いしきいめと昔世ふの草の唐のつものぬさる結んた
あさひく花れ紅葉と初ゆかありれ一長るるゆか
世中と袖しぬさうり村ゆかゆかともさうりな
あまのり月日しかくうふ初ゆかゆかうけいさるゆか
吹入初ゆかのうさの音さうりみしてゆかのはのいけい
もさるゆかまの月あいつと老のゆかあるうりゆか
時雨告冬
あまのりゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

胡弓曲

いさ(あ)うあともさあゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

夕吹曲

永正九十四月次
あまのりゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか
永正九十四月次

枕上時雨

あまのりゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか
後撰秀六永正三十三月次
いさゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

山時雨

あまのりゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか

永徳元十四月次

山路時雨

ぬれしやう 山路の袖やさうあかき白の雲の空をうかす

文内十三

松時雨

閑みしてゆきのをきし可ぬゆめと川なりの色うらみは

用時雨

閑みぬ袖いさよふにじにゆきの浦浪たよよとて

永徳元十四月次

遊邊時雨

らよしめめいさうりて落遊はきくもさしはらうて

文徳元十四月次

里河雨

初河由里まらけはひもさきくはらうて

文徳元十四月次

行路時雨

宿もる花さくははけと強き日の死すまはし可ぬはなり

木枯

み山もしましき思もぬも花也花のうらみえうらん

文明十三十二月次

落葉

夕酒られしめりさうらうに花らうらうしきもあふ

ひらひそや秋の若葉もさうらうらうの枝のあ葉がわい

永徳元十四月次

見ぬはらう可ぬのうらみさきうらうらうの葉を

花いさうやうらうらうのうらみさきうらうの葉を

風前落葉

らんあつてふいせうらうらう吹凡のさかたにたなみあり
文徳元又四月次
らうせうらうかいてさあひさうら凡さうのたのめらうら

永正六十四月次

葉落月明

ちとせうらう月のめらうら木こたふ葉のふかあ

文明十三

落葉混雨

あま

梢わらうらうらうら紅のたもあふたぬさうら

橋落葉

秋のほみ葉とりうら山ふかあ可あせあうらうら

橋上落葉

お葉もや昔のうら木のこらうらあああああ昔のけ

文徳四国三日月次

雲落葉

うらあの色はけうら紅葉うらまがうらたあはは

享保四年十月廿五日

落葉深

うらうらあひはけうら紅葉うらまがうらたあはは

あひはけうらあひはけうら紅葉うらまがうらたあはは

霜

じとんあふあも木のこらうらあああああああああ

尚城新宮信吉

和歌

御島のゆらうらうら花のゆらうらうらうらうらうら

垣根

あま出づ垣のつゆもあまのつゆもあまのつゆもあまのつゆも

藤霜

千文明十三

貞元十二年四月

文相十三十二年

いほわつ霜をうらむるあまのつゆもあまのつゆもあまのつゆもあまのつゆも

苔徑霜

あすのちの垣のつゆもあまのつゆもあまのつゆもあまのつゆも

永正十二年四月

あまのつゆもあまのつゆもあまのつゆもあまのつゆも

残菊帯霜

仙人のつゆもあまのつゆもあまのつゆもあまのつゆも

奥草

あまのつゆもあまのつゆもあまのつゆもあまのつゆも

垣根寒草

永正十二年四月

あまのつゆもあまのつゆもあまのつゆもあまのつゆも

後撰卷六十六

あまのつゆもあまのつゆもあまのつゆもあまのつゆも

牆根寒草

冬のよのきつひのやみふくむくもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくも

永正九年四月文

庭寒草

冬に似り朔の夜の庭に雪もふくむくもふくむくもふくむくもふくむくも

永正七八四月文

庭寒草

里のあもして心のゆきもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくも

大樹今又明正

月冷照寒草

月を今未葉にこころは清き原もふくむくもふくむくもふくむくも

寒草

ふくむくもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくも

寒草

冬に似りすしゆめりいふくむくもふくむくもふくむくもふくむくも

續撰吟集三

江寒草

冬に似り入りのあもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくも

寒草

はやに似りあもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくも

草

石田に似りあもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくも

續撰吟集三

あもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくも

若に似りあもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくもふくむくも

草初結

にめらぬ月の光もや水の花のしるしをさうみ
ききしるの契りにとりてはしらぬてはらぬ朝のあ

永正六十四月欠

橋下抄

ぬじののけしてさるし一羽のまもるしよるなれり

永正三十四月欠

抄

千文明十三

おしとら一箇のうひてはらぬのまのよとをさる
山形も冬やふりてはらぬのまのよとをさる
石のうはらぬのまのよとをさる

河抄

梅く水にあらゆきとみさくまのはらぬのまのよとをさる

柏道檄抄

河上氷

谷

あ

さしちてまやふのうはらぬのまのよとをさる
さし出のうはらぬのまのよとをさる

河抄

永正八十四月欠

河抄のうはらぬのまのよとをさる

各命古の軍家哥各

菅平回水

池の面いのも成せしとらぬのまのよとをさる

井抄

冬ぬもほほもみさるの井の面いのも成せしとらぬのまのよとをさる
さし一本の曉うら山の井の面いのも成せしとらぬのまのよとをさる

冬月

寶撰吟三

草乃原のうらぬまきを枯よえしひつり雪の月ふる
るみめくみかふくえのあしれをみかふる冬月
春秋のやうれまに天河冬とみわぬ月と
月しこうささしぬだん山のまの岬しつる雪はさけつ

見冬月

花のとと初葉のうらふかきもくまひつれ冬のおり月
寒月

落葉をうらひてしつるせよ木立の身つぎを枯く
寒夜月

永正六年四月文

何とせふとこしめ及くた月のおおの木のりのる

冬山月

永正七年四月文

木立の山路をうらて木ののをみかふる冬月

冬暖月

おうかぬるあふくから暖のあはして袖とよる月

寒月

永正七年四月文

草茂しじとすこめぬ月や圃の中す秋のあまきりか

冬夜誰曙

いく祓覚あよしれあまきりか
千鳥

永正二十四四月文

旅りてはむいさきまに東衣うらふりてあきかくて
永正五首

あふら車のかきまらして霜白何原のみさうきまたらあ也
まなまへいふまの川浪くうら君とあせもひき子とりの
なく祓ふいふ世とくしとく田子とりの田のまを君よか
東衣うらふらまらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
うらのうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
まのむいさきまに東衣うらふらうらうらうらうらうらうら
霜かきまらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
とらぬ花さきまらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

尋千鳥

夕ちき

いさかきまらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
夕ちき

添ちき

夕ちきのあきまらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
添ちき
いさかきまらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
永正二十四月次

湖ちき

東衣うらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
湖ちき
浦千鳥

文政元十二月六

友子とあまのうらりくはるせうかおひけりてはなれり
浦凡のぬり経てよらの翅やおやすめはる千鳥鳴ん

浦仔千鳥

世中らぶけの浦の浪せめりり海んくちあふり
成千鳥

浪もこころうもきて過すの成りあふり
濱千鳥

いほいほ友成かふらふ田千鳥のうらりてはなれり
鳴千鳥

玉てうらりこのえ白きうらり海んくちあふり

これのうらり新鳴もりの女もうらりてはなれり

伯千鳥

なく子とら月とあふり成花もももはなれり
ちきりうらり

氷のうらりてはなれり

田尻鷹

冬ぬり田ありのりの雪のうらりてはなれり

水鳥

かほりうらりてはなれり
あまのうらりてはなれり

いふる世にうらやまの海にわたるも
寒く水鳥

永正三十四月文

續撰吟集三 池も鳥

池のよるうらやまの海にわたるも
いふる世にうらやまの海にわたるも

大永正三十四月文 池も鳥

永正三十四月文 池も鳥

かたてのうらやまの海にわたるも
いふる世にうらやまの海にわたるも

續撰吟集三 湖も鳥

いふる世にうらやまの海にわたるも
いふる世にうらやまの海にわたるも

永正三十四月文

池のよるうらやまの海にわたるも
いふる世にうらやまの海にわたるも

文龜三二四月文

いふる世にうらやまの海にわたるも
いふる世にうらやまの海にわたるも

細代

たがめさひうらやまの海にわたるも
いふる世にうらやまの海にわたるも

尋細代

永正十一年四月文

夕月東おぼつたもたなむあつらふわなをみし

十首和歌下

夜細代

あつらふ川東の浪の夜感いしとら袖うてとら
浪のりせのりるうたよはてゆいふらう入暮る

文龜元国守 月文

豊明節會

若代よりあふくにし女子うらうらに袖うみ見

推栄

もくそく落しふの物しあふなるる嵐の推栄

霽

いこのちのまむひさしてくらくまはあむらうりき霽が

うみわたらうまはくひの物らわらわら霽ら

いそくあちあちのまむひいひいひあふ

篠霽

あふぬれあふくらくり篠のいふと方て霽ら

林回霽

よこまよあふくはくわらわら月の色うれいけ

野霽

あふゆ末の原の夕附日とや拍のしけうあけ

草奄霽

よふ人のよの葉草の夕よあてあはななをのま

古屋露

雲

庭りあはらしてしうらぶるの香もばらばらぬわらわは
いほくらにわらわの香のぬらばらばらわらわらわらわ
か〜^{永正十四四月六}吹推のうらぶの自妙よみわらわらわらわらわらわ

^{永正十四四月六}雪

わらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわ
あ〜^{永正十四四月六}あはらわらわらわらわらわらわらわらわらわ
あ〜あはらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわ

^{永正十四四月六}明先事紀は示
あ〜あはらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわ
あ〜あはらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわ

待雪

さき女のあはらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわ

^{文龜二六四月}あ〜あはらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわ
^{各三十三}あ〜あはらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわ
あ〜あはらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわ

ふ初雪

し、初人のあはらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわ

雪朝

し朝乃ゆのゆいかによみかへにらふ花ゆのいづれか
停る訪客

きしあつとよむらゝいぬさきこのあつとみく高下店

永正元年四月日 雪中訪人

永正十一年四月日 雪中客来

こわれてゆららの松枝も雪の朝の宿よりあつらん
保雪

うすうのこの白雲のひくもつこい人のあつらん山

あまも本もみこころ雪の海よりこころいづれかゆらつらん

ゆらゆらこころ七奉らん

おしるるわらり雪のあつらん又の井のりあつらん松の木ゆららん

うらもくにあれあつらん竹の下道の中いづれか

永正十一年四月日 積雪

人のあつらん雪のあつらん道よりこころあつらん

文明十三年三月五日 所もれなぬうとこころ宿のいりあつらん

松雪

あつらん雪はけきし此の雪しきしてほとふか松の白雪
雪埋松

うたはねとあつきのけしきよきとせうもやきふとまのき

永正九月日朝会 斬 竹 雪
竹のしほくけり雪のりふとてあふちりみしほはふとみさか

文龜元正四月 文 杣雪

心志のふくしあええ輪のしほふちうと雪の秋む

文龜正二十四日 常盤木雪

初雪のあけけり山の雪松原かて葉のぬきみそ
たの書かきめりてゆきまくの橋原の雪に朝晴なり

遠山雪

雪のふりかきりりいゆふにたまるきせぬる白雪

吹くゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

永正二十四日 山路雪

かきりあけけりり道ふゆきゆきゆきゆきゆきゆき

文龜元正四月 嶺雪

ゆきゆきゆきのゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

遠嶺雪

雪のふりかきりりゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

永正二十四日 野道 雪のりけりゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

閑路雪

ゆきのゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

杜雪

かねもよほ梢の花とまらむ雪に花はなれど雪はなれど

楊上雪

梅のうき雪こころのうき雪の跡はつらき雪のうき雪の本

永正二八月廿 野亭雪

さしひらけたる雪のうき雪のうき雪のうき雪のうき雪のうき雪

野雪

永正二八月廿

あまの雪のうき雪と花のうき雪のうき雪のうき雪のうき雪の

永正二八月廿

原雪

もよほしる雪のうき雪と花のうき雪のうき雪のうき雪のうき雪

浦雪

千文相十三

なつとる雪のうき雪と花のうき雪のうき雪のうき雪のうき雪

池岸雪

うき雪のうき雪と花のうき雪のうき雪のうき雪のうき雪

文龜三四月

里雪

あまの雪のうき雪と花のうき雪のうき雪のうき雪のうき雪

都雪

あまの雪のうき雪と花のうき雪のうき雪のうき雪のうき雪

庭雪

永正二八月廿

あまの雪のうき雪と花のうき雪のうき雪のうき雪のうき雪

禁庭雪

永正六十二年四月次

四方乃山しむらみとらふらふの年とわら井の庭とみく雪か

雪の雪

永正七十二年四月次

花の雪にがらにまらぬり田の雪のこりたるれ

古寺雪

山をばにまぬけぬる雪の雪とらふらふの雪の雪

山家雪納

雪所那くふらふ紅葉とらふむむに雪の雪とらふ雪の雪

山家雪

雪の雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪

用后雪

天明三

ひらけらぬ雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪

行路雪

永正元年十一月次

小車雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪

とらふ雪の雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪

雪理行路

永正元年十一月次

しゆ雪に雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪

雪蔵帰路

永正十三年四月次

ゆらゆら雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪とらふ雪の雪

後宿雪

天明十六年七月

昨日より山路を歩いたる中、いかに雪の降るるの

雪似白雲

忘れての雪も、いかに降るといふに、いかに降るる

雪の音

ゆきゆきと降るる雪、いかに降るといふに、いかに降るる

雪中望

永享二年四月

いかに降るといふに、いかに降るるといふに、いかに降るる

雪中眺望

文龜三年四月

いかに降るといふに、いかに降るるといふに、いかに降るる

いかに降るといふに

あけて、いかに降るといふに、いかに降るるといふに、いかに降るる

江天雪景

いかに降るといふに、いかに降るるといふに、いかに降るる

雪中望

いかに降るといふに、いかに降るるといふに、いかに降るる

雪中望

いかに降るといふに、いかに降るるといふに、いかに降るる

夕霧の將

永正五十八年四月
夕霧の將
あけぬけのしほやうらなふあはれなき
あけぬけのしほやうらなふあはれなき

炭竈

あけぬけのしほやうらなふあはれなき
あけぬけのしほやうらなふあはれなき

永正三十二年

炭竈煙

あけぬけのしほやうらなふあはれなき
あけぬけのしほやうらなふあはれなき

永正九十四年

雅

雅

あけぬけのしほやうらなふあはれなき
あけぬけのしほやうらなふあはれなき

雅集

永正六十四年

念

あけぬけのしほやうらなふあはれなき
あけぬけのしほやうらなふあはれなき

夜更の重念

あけぬけのしほやうらなふあはれなき
あけぬけのしほやうらなふあはれなき

炉火

千五明十三

冬に...の梅は...の梅は...

爐邊周僕

冬三十一日

...の梅は...の梅は...

埋火

...の梅は...の梅は...

...の梅は...の梅は...

寒衣埋火

冬九十二日

...の梅は...の梅は...

神樂

冬三十一日

...の梅は...の梅は...

冬三十一日

...の梅は...の梅は...

...の梅は...の梅は...

月夜神樂

...の梅は...の梅は...

秋神樂

冬三十一日

...の梅は...の梅は...

佛名

...の梅は...の梅は...

...の梅は...の梅は...

早梅

永正十一年六月廿四日

梅のやうな花のふりしるしに

年内梅

昔はとてふもよかしの外も

年内早梅

いふもいふもよかしの外も

久遠二四月次

いふもいふもよかしの外も

梅のやうな花のふりしるしに

年内梅

昔はとてふもよかしの外も

千七百

梅のやうな花のふりしるしに

永正三十四年

梅のやうな花のふりしるしに

年内梅

昔はとてふもよかしの外も

永正三十五年

梅のやうな花のふりしるしに

年内梅

昔はとてふもよかしの外も

年内梅

永正二十三年四月

舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜

張標

舟中津夜

舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜

舟中津夜

舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜

舟中津夜

舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜

舟中津夜

舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜

舟中津夜

舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜

舟中津夜

舟中津夜

舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜

舟中津夜

舟中津夜

舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜

舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜

舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜

舟中津夜

舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜
舟中津夜

冬親和

わらもく柳白河の村にすむ人々の村

又ノノ

取寄^{取寄}の村にすむ人々の村

冬親

とく^{とく}の村にすむ人々の村

冬親

とく^{とく}の村にすむ人々の村

冬親

とく^{とく}の村にすむ人々の村

冬親

とく^{とく}の村にすむ人々の村

冬親

とく^{とく}の村にすむ人々の村

冬親

とく^{とく}の村にすむ人々の村

冬親

とく^{とく}の村にすむ人々の村

冬親

とく^{とく}の村にすむ人々の村

永高田日記

冬香

長江のほとり果たすけふし袖の香もよしの香残とし

冬色

永高田日記
永高田月欠

くすくすの音もよしの香もよしの香残とし

冬祝

うしろの松の音もよしの香もよしの香残とし

薪

思の如しの音もよしの香もよしの香残とし

雪

ゆきゆきと雪の音もよしの香もよしの香残とし

河

いよよと川の音もよしの香もよしの香残とし

雪

雪



